

今月のメッセージ (2012年10月)

日本銀行富山事務所長
佐子 裕厚

売薬さんの女房

「富山の女性は働き者だよ」。富山に来て何度もこの言葉を聞きました。

統計をみても、富山の生産年齢の女性(15歳～64歳)の有業率は全国1位(69.8%、平成19年)ですし、共働き率も全国3位(56.8%、平成17年)です。女性の平均勤続年数が全国4位(10.5年、平成22年)、小学校の教員に占める女性の割合が全国3位(68.2%、平成21年)、保育所入所率が全国4位(67.3%、平成21年)といった結果をみても、女性が当県の経済を労働力として支えていることが良くわかります。

先日、当地の方がこんな話をしてくれました。

「富山の女性が働き者なのは、富山に売薬さん¹が多かったからですよ。売薬さんは旅に出ると何か月も家を留守にするので、奥さんたちが働いて家族を守っていくことが当たり前になったのです」。

「越中のおんな」という本²を読みますと、売薬さんの女房達が働き者だったことが良くわかりますし、売薬さんの女房でなくても、江戸時代の富山の女性が、家事一切を取り仕切りながら、養蚕、木綿織物、田植え、和紙作り、ワラ製品作り、山菜採りなどの仕事に携わり、家計を支えていたことがわかります。

こうした女性の頑張りが、富山への富の集積を生み、県内各地の曳山祭りや「おわら」を始めるための経済的なバックグラウンドになっていったのですが、それはさておき、現在、富山県の女性の有業率の高さは、少子高齢化対策を進めるうえでのモデルケースになってきています。

本年7月6日、富山市に新しい観光スポットとして「高志の国文学館」が開館しました。奈良時代に国司として赴任した大伴家持の和歌も数多く展示・紹介されています。

「雄神川くれないにほう少女らし 葦つきとると瀬に立たすらし」という家持の和歌があります。働き者の富山の女性の姿は、実は万葉の時代からだったのかもしれない。

以上

¹ 売薬商人のこと。江戸時代に富山藩で振興策が取られ、売薬のために全国を歩き回った。

² 新興出版社。北川敦子編著。